

# 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に関する総合的研究 — 神画と儀礼文献と儀礼実践からの立体化の試み —

## 目 次

第1章 序論—問題の所在—	1
第1節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画研究の課題	1
第2節 研究方法と研究目的	4
第1項 儀礼神画から	5
第2項 儀礼文献から	5
第3項 儀礼実践から	5
第3節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の現地調査	6
第4節 論文の構成	8
第2章 湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族(ミエン)の概況	11
第1節 人口・分布	11
第2節 自然環境・生業	12
第3節 年中行事・宗教文化	13
第3章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画について	17
第1節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画とは	17
第2節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の現状	19
第3節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の種類と名称	21
第4節 湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族(ミエン)の祭司と神画	22
第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析	24
第1節 分析に用いる神画資料について	24
第1項 湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村神画	25
第2項 湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷荊竹坪村寒鷄冲組神画	28
第3項 湖南省永州市藍山県所城鎮団源村神画	29
第4項 湖南省永州市江華瑶族自治县神画	31

第5項	湖南省永州市江華瑶族自治県両岔河郷両岔河村神画	33
第6項	広西壮族自治区恭城瑶族自治県蓮華鎮神画	33
第7項	広西壮族自治区恭城瑶族自治県三江郷洗脚嶺村神画	35
第8項	広西壮族自治区恭城瑶族自治県三江郷養牛坪神画	36
第9項	タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村神画	37
第10項	台北世界宗教博物館所蔵神画	38
第11項	南山大学人類学博物館所蔵西北タイ神画	39
第2節	読み取りの対象と神画内容異同表について	40
第3節	異なる過山系ヤオ族(ミエン)地域の同種の神画に描かれる内容の異同	41
第1項	元始天尊神画に描かれる内容について(別冊・表1)	41
第2項	靈寶天尊神画に描かれる内容について(別冊・表2)	43
第3項	道德天尊神画に描かれる内容について(別冊・表3)	44
第4項	玉皇神画に描かれる内容について(別冊・表4)	47
第5項	聖主神画に描かれる内容について(別冊・表5)	48
第6項	四府神画に描かれる内容について(別冊・表6, 表7)	49
第7項	張天師神画に描かれる内容について(別冊・表8)	53
第8項	李天師神画に描かれる内容について(別冊・表9)	54
第9項	把壇師(趙元帥)神画に描かれる内容について(別冊・表10)	55
第10項	馬元帥神画に描かれる内容について(別冊・表11)	56
第11項	王靈官神画に描かれる内容について(別冊・表12)	57
第12項	鄧元帥神画に描かれる内容について(別冊・表13)	57
第13項	大海幡神画に描かれる内容について(別冊・表14)	58
第14項	十殿神画に描かれる内容について(別冊・表15)	59
第15項	海幡張趙二郎神画に描かれる内容について(別冊・表16)	60
第16項	太尉神画に描かれる内容について(別冊・表17)	61
第17項	三將軍神画に描かれる内容について(別冊・表18)	61
第18項	監齋大王神画に描かれる内容について(別冊・表19)	62
第19項	総壇神画に描かれる内容について	63
第20項	その他の神画について	64
20-1.	禁齋神画に描かれる内容について	64
20-2.	庫官神画に描かれる内容について	65
20-3.	王姥神画に描かれる内容について	66
20-4.	四府功曹神画に描かれる内容について	66

まとめ	68
第4節 神画に書かれる銘文について(別冊・表20)	68
第1項 銘文内容の分析	68
第2項 銘文から見た神画の制作	70
第3項 銘文から見た神々に対する祈願	71
第5節 神画に描かれる神々について	72
第1項 神画に描かれる神々の区分について	72
第2項 神画の読み取りから見た神々の位について	74
第3項 神画の道教的な影響	74
第4項 神画から見た過山系ヤオ族(ミエン)の特色	75
第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析	81
第1節 請聖書と賞光書について	81
第2節 儀礼文献に収められる神画に描かれた神々に関する記述	83
第1項 「混沌歌」から見た神画に描かれる神々	83
第2項 三清神(元始天尊・靈寶天尊・道德天尊)に関する記述	93
第3項 玉皇に関する記述	96
第4項 聖主に関する記述	97
第5項 天師(張天師・李天師)に関する記述	99
第6項 四府(天府・地府・水府・陽間)に関する記述	101
第7項 三將軍に関する記述	104
第8項 元帥神に関する記述	105
第9項 海番張趙二郎に関する記述	107
第10項 太尉に関する記述	109
第3節 儀礼文献から見た神画に描かれる神々	113
第6章 儀礼実践から見た過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の使用	118
第1節 神画を用いる儀礼について	118
第2節 儀礼神画の所持及び使用の資格について	118
第1項 「掛三灯」儀礼における授法の状況について	119
1-1. 「勅変水」「勅変米」「勅変布」「勅変銭」	120
1-2. 「掛三灯」儀礼の中心部分	120
1-2-1. 「昇灯」「掛灯」	120



1-2-2. 「取法名」 .....	121
1-2-3. 「撥橋」「撥路」「撥兵」「撥将」「撥法」「分兵」「吹米」 .....	121
1-2-4. 「接香炉」 .....	121
1-2-5. 「学打鑼」「学吹牛角」「学用卦」「学揺鈴」「学罡歩」 .....	125
1-3. 「掛三灯」儀礼から見た授法と「行師」神画との関連 .....	122
第2項 「度戒」儀礼における授法の状況について .....	124
2-1. 「補掛三灯」 .....	125
2-2. 「掛十二盞大羅明月灯」 .....	125
2-3. 「開天門」 .....	125
2-4. 「攀刀山(翻刀山)」・「度水槽」・「度棘床(度勒床)」 .....	125
2-5. 「上刀梯」「上刀山」 .....	126
2-6. 「捧火石」「捧火磚」 .....	126
2-7. 「昇職位」 .....	126
2-8. 「宣布戒律」「大戒文」 .....	127
2-9. 「分兵」 .....	127
2-10. 「度戒」儀礼から見た授法と「三清兵馬」神画との関連 .....	128
第3項 儀礼神画の所持及び使用の資格 .....	130
第3節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の開光儀礼について .....	130
第1項 靈寶天尊神画の開光儀礼 .....	131
第2項 開光儀礼に使用する文書について .....	135
2-1. 開光表 .....	136
2-2. 開光疏 .....	139
2-3. 開光表と開光疏に記される内容の異同 .....	141
2-4. 開光表・開光疏から見た神画を新たに制作される理由 .....	143
2-5. 開光表・開光疏から見た開光儀礼の内容 .....	144
2-6. 開光表・開光疏から見た祈願内容 .....	146
2-7. 開光表・開光疏から見た開光儀礼の目的と意味 .....	147
第4節 儀礼実践から見た神画の使用 .....	147
第1項 「還家願」儀礼から見た神画の使用 .....	148
1-1. 「落兵落将」 .....	150
1-2. 「掛聖」 .....	150
1-3. 「収聖」 .....	150
1-4. 「拆兵」 .....	150



1-5. 「還家願」儀礼から見た神画の使用に関わること .....	153
第2項 「度戒」儀礼から見た神画の使用 .....	154
2-1. 「掛聖」 .....	156
2-2. 「認三清」 .....	157
2-3. 儀礼内容から見た神画の使用 .....	159
2-4. タイ北部・ラオス中部の過山系ヤオ族儀礼から見た神画の使用.....	160
2-4-1. タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村の事例.....	160
2-4-2. ラオス中部ヤオ族村の事例 .....	162
2-5. 儀礼における神画の役割 .....	162
第5節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の持つ意味 .....	165
第7章 結論.....	172
第4章・第5章・第6章の要約 .....	172
儀礼神画の特殊性と普遍性 .....	173
儀礼神画と儀礼文献と祭司と儀礼実践との関係 .....	174
今後の課題 .....	176
謝辞.....	178
参考文献.....	179

## 写真目録

写真 1 祭壇正面の壁に掛けられている神画.....	17
写真 2 祭壇から下ろした神画を巻く.....	18
写真 3 白布で神画を包む.....	18
写真 4 師棍に縛り付けられた神画.....	18
写真 5 バイクの後ろに縛られた神画と法具など.....	18
写真 6 弟子の頭に付けている神頭.....	20
写真 7 祭司の頭に付けている神挿.....	20
写真 8 『請聖書』の表紙.....	81
写真 8-1 『請聖書』の第一頁.....	81
写真 9 『賞光書』の表紙.....	82
写真 9-1 『賞光書』の第一頁.....	82
写真 10 職位火牌.....	127
写真 11 職位火牌を三清神に承認してもらう.....	127
写真 12 紅紙を貼られた三清神画.....	154
写真 13 陰橋の上に大道橋梁神画を置く.....	156
写真 14 陰橋を主祭場の中へ入れる.....	156
写真 15 主祭場の中から見た陰橋の様子.....	157
写真 16 四府功曹神画を掛ける.....	157
写真 17 祖霊旗の位に掛けられた監斎大王神画.....	157
写真 18 神画を裏返して掛ける.....	157
写真 19 壁の裏に並んで立つ夫人たち.....	157
写真 20 布団中で熟睡しているふりをする会首たち.....	158
写真 21 会首から渡された白布を引く夫人たち.....	158
写真 22 主祭場側に残した白布の一端.....	158
写真 23 酒甕の上に畳んだ白布.....	158

## 図表目録

図 1	中国及び東南アジア北部の過山系ヤオ族(ミエン)の分布地	1
図 2	神画資料収集地の藍山県・江華瑶族自治县・恭城瑶族自治县の位置図	6
図 3	湖南省における藍山県の位置図	13
図 4	湖南省永州市藍山県地図	25
図 5	湖南省永州市江華瑶族自治县地図	31
図 6	広西壮族自治区恭城瑶族自治县地図	34
図 7	『山海経図』に描かれる夔	55
図 8	靈寶天尊神画開光儀礼の供物台及び神画の配置	131
図 9	還家願儀礼神画配置図	149
図 10	度戒儀礼主祭場配置図	155
図 11	主祭場平面図	161
表 1	元始天尊神画に描かれた内容の異同	別冊 58
表 2	靈寶天尊神画に描かれた内容の異同	別冊 59
表 3	道德天尊神画に描かれた内容の異同	別冊 60
表 4	玉皇神画に描かれた内容の異同	別冊 61
表 5	聖主神画に描かれた内容の異同	別冊 62
表 6	四府(右)神画に描かれた内容の異同	別冊 63
表 7	四府(左)神画に描かれた内容の異同	別冊 65
表 8	張天師神画に描かれた内容の異同	別冊 67
表 9	李天師神画に描かれた内容の異同	別冊 68
表 10	把壇師神画に描かれた内容の異同	別冊 69
表 11	馬元帥神画に描かれた内容の異同	別冊 70
表 12	王靈官神画に描かれた内容の異同	別冊 71
表 13	鄧元帥神画に描かれた内容の異同	別冊 72
表 14	大海蟠神画に描かれた内容の異同	別冊 73
表 15	十殿神画に描かれた内容の異同	別冊 75
表 16	海蟠張趙二郎神画に描かれた内容の異同	別冊 76
表 17	太尉神画に描かれた内容の異同	別冊 77
表 18	三將軍神画に描かれた内容の異同	別冊 78
表 19	監齋大王神画に描かれた内容の異同	別冊 79



表 20 神画に書かれた銘文.....	別冊 80
表 21 神画に描かれている神々の区分表.....	73
表 22 儀礼文献から読み取れた神々の情報一覧表.....	113
表 23 掛三灯儀礼を通じて伝授される法と能力一覧表.....	122
表 24 度戒儀礼で伝授される法と能力の一覧表.....	128
表 25 還家願儀礼における祭司の役職・分担された儀礼内容・使用された神画の数.....	148
表 26 度戒儀礼における祭司の役職・分担された儀礼内容・使用された神画と数.....	154
付録：湖南省永州市藍山県『請聖書』・『賞光書』目録.....	別冊・81

## 第1章 序論—問題の所在—

本章では、過山系ヤオ族(ミエン)の伝承し、彼らの信仰している神々が描かれている掛軸(掛物)について、これまでに明らかにされてきたことを述べるとともに、本研究の課題を示す。この掛軸は過山系ヤオ族(ミエン)の祭司によって所持され、儀礼の時しか使用しない重要な法具である。なお、本論では、この掛軸に対して、「儀礼神画」という語を用いる(以下、神画と略す場合がある)。

## 第1節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画研究の課題

過山系ヤオ族は、民族自称を「ミエン」といい、ヤオ族の中において最も移動性に富む集団であるとされる[吉野 1994: 94]。ミエンは中国南部の主に湖南省、広東省、広西チワン族自治区、貴州省、雲南省に分布し、さらに国境を越えてベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーの北部の山地にも広く居住している。



〈図1〉 中国及び東南アジア北部の過山系ヤオ族(ミエン)の分布地<sup>1</sup>

過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に関する研究が始まったのが、80年代初頭からであると考えられる。現在まで出版されたミエン儀礼神画に関する著作は非常に少なく、専門書を書いたことのある研究者は Jacques Lemoine のほかに一人もいない。このフランスの民族学者は、*Yao Ceremonial Paintings*[1982]の中で、自分と8人の個人収集家による収蔵品が紹介されており、

約200点のヤオ族儀礼神画を掲出している。著書には、Lemoine自身がタイ及びラオスに居住する過山系ヤオ族(ミエン)の現地調査の際に撮影した写真を載せ、ミエンの日頃の儀礼について簡単に解説している。神画の部分では、Fam Ts'ing, The Three Pure Ones(三清)・The Jade Emperor and the Master of The Saints(玉皇と聖主)・The Celestial Masters(天師)・Tai Wai, the High Constable(太尉)・Hoi Fan, 'The Sea Banner'(海幡)・The Governors of This World and The Waters(陽間と水府)・The Governors of the Sky and The Underground(天府と地府)・The lords of the Ten Tribunals of Hades(十殿靈皇)・The Marshals(元帥)・The Three Generals(三將軍)・The Ancestors(息壇)・The Forebears(家先)・The Dragon Bridge of the Great Tao(大道龍橋)・The Enforcers of fasting and chastity(禁齋と禁庚)・P'an Hu's Five Banners of knights(五旗兵馬)・Masksなどの章を分け、膨大な図像資料を提示したと共に、神画に描かれている神々はどのような神であるかについて論じ、神々の装束・姿勢・服飾などについて紹介した。だが、残念なことに神画が使用される儀礼を踏まえた神画に関する分析や論述はなされていない。神画を用いる儀礼及び儀礼文献などについても全く触れていない。

この著作の他には、神画と関連する写真集が出版された。Jess G. Pourret は *The Yao. The Mien and Mun Yao in China, Vietnam, Laos and Thailand*[2002]の中で、中国・ベトナム・ラオス・タイに居住するミエンとモン族が持っている儀礼神画の写真資料を掲載すると共に簡単な説明文を加えた。但し、神画の掲載順番には混乱が感じられ、神画は神画に描かれている神の位の高低によって順位があることについての考察がない。そして神画が使用される儀礼や宗教文献にも触れられていない。また、*Thanh Thờ Các dân tộc thiểu số phía bắc Việt Nam Quý Đông Sơn Ngày Nay*[2006]の中では、セットとなるミエンの神画の写真資料が掲載され、主に写真を中心的に紹介する図録であるため、簡単な説明文しか加えられていない。また、*Taoist Painting of Northe Vietnam* [2008]の中で、ミエンを含むベトナム北部の諸少数民族の儀礼に用いられる神画の写真資料が掲載され、目玉として The long scroll・Yin xianglu・shengdao xinglong の種類の神画について詳細な読み取り分析が行われ、神画に示された事物や神々について丁寧に解説されている。The long scroll と shengdao xinglong 神画は、それぞれ *Yao Ceremonial Paintings*[1982]中の Tom To Luang Tsiau(大道龍橋)、Tsong Tan(息壇)及び Chia Fin(家先)神画に似るが、神画の構図及び内容は同様ではない。著作にはミエン系の神画は約2セット紹介され、神画に描かれる内容に対して解説しているが、やはり神画を用いる儀礼及び儀礼文献に関する考察を触れていない。以上述べたこれらの写真集に掲載されたミエンが丹念に保管されていた儀礼神画の写真は非常に精美であり、神画に描かれる内容を比較分析する参考資料としても貴重である。

中国国内における過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に関する研究は、21世紀に入って始まった。



現在まで出版された専門著作は一冊もない。儀礼神画に関する研究分野で活躍する黄建福は修士学位申請論文「盤瑤神像画研究—以広西金秀県道江村古堡屯盤瑤神像画為例」[2008]の中で、広西金秀県道江村古堡屯のヤオが持っている神画の製作状況を紹介すると共に、神画に描かれた神々及び神画を用いる度戒儀礼及び葬送儀礼について簡単に紹介し、芸術人類学の角度から儀礼神画を考察し、神画の持つ美的な意義を論及した。これ以外には、同じく黄建福は「盤瑤神像画之作画目的及社会作用」[2009a]の中では、神画は宗教儀式の媒介とするものであり、宗教觀念の絵画的表現であり、自民族の歴史文化を認識する重要な手段であるといっている。

「論芸術人類学視野中的盤瑤神像画」[2009b]の中で、神画はヤオ族の宇宙觀念と宗教芸術の表現であるといっている。「論瑤族神像画研究的文化意義与現代価値」[2012a]の中では、神画の文化及び研究上の価値を述べ、どのようにヤオ族の神画芸術を保護し伝承するのかについて提案した。「論瑤族神像画的源流及其与瑤族伝統文化的關係」[2012b]の中で、神画の起源は道教の神像絵画芸術であるといっている。「論瑤族神像画的源流」[2012c]の中では、神画は魏晉時期に道教と共にヤオ族地域に伝われ、現在の神画の様式が形成されたのは明清代であるといっている。「論盤瑤神像画的審美意識及其芸術風格」[2010]の中で、神画の構図や遠近法や様式などから見た神画の持つ美的な意義を論及した。黄建福の他には、周飛戟は「永州盤瑤神像画研究」[2011]の中では、神画の芸術的な特色や巫教及び道教との関係などについて簡単に述べ、ヤオ族社会において神画は祭祀と教育の役割を果たしているといっている。

また中国湖南省永州市藍山県及び広西壮族自治区恭城瑤族自治県のミエンが伝承している儀礼に用いられる儀礼神画に関する報告及び考察は、拙稿の「還家願儀礼における神画の使用について」[2012b]、「ヤオ族に見る『三清神』について—中国湖南省藍山縣匯源郷湘藍村の三清神画及び宗教文献からの考察」[2012c]、「神画の複製作業からヤオ族文化の保存と創意を考える」[2012d]、「ヤオ族儀礼神画の研究—広西チワン族自治区恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村盤王祭を事例として—」[2014b]がある。

以上を踏まえた上で、これまでの過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に関する研究は、単に芸術学のアプローチ、ヤオ族社会における役割・保存と伝承・神画に描かれる神々についての簡単な論述に留まっている。また、ミエンの儀礼神画は道教の影響を受けていると論述されているが、分析と考察が不足しているため論述が足りなかった。特に、神画の要素を踏まえた神画に描かれる内容の詳細な分析、神画に描かれる神々に関する文献記述の分析、儀礼における神画の使用に関する考察について十分に行われていなかった。

筆者の把握では、ミエンは様々な儀礼を伝承しているが、必ずしも全ての儀礼で神画を使用するわけではない。中国湖南省永州市藍山県のミエンの村落で行われる儀礼において、神画が

必要な場合は、儀礼の当日に祭司が自ら所持している神画を祭場に持って行く。祭司は祭場に到着後、まず祭壇の前で神画を手に持ち、唱えごとをしながら落兵落将<sup>2</sup> 儀礼を行う。その後、神画を祭壇の正面と両側の壁に掛けて掛聖儀礼を行い、儀礼に向けた準備をする。儀礼中、祭司たちは神画に描かれる神々についての記述を収めている請聖書<sup>3</sup> というジャンルの儀礼文献を読誦し、請聖儀礼<sup>4</sup> を進行する。そして儀礼の最終段階においては、請聖儀礼に対して送聖儀礼が行われ、掛聖儀礼に対して収聖<sup>5</sup> 儀礼が執行され、落兵落将儀礼に対して拆兵<sup>6</sup> 儀礼が行われる。このようにミエンの儀礼神画は、単なる祭壇を設けるためだけに掛けられる掛軸ではなく、儀礼内容と儀礼文献、さらにそれを所有する祭司と大きな繋がりを持っているのである。こうしたミエンの儀礼において重要な法具とする神画を考察するには、神画と祭司との関係・神画を用いる儀礼における神画使用の実態・儀礼において神画と組み合わせて使われる儀礼文献に関する考察を行わなくてはならない。本論では、この研究の空白ゾーンに焦点を当てる一方で、儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践の三方向から儀礼神画を考察していく。

本論では、神画について神々の顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色、衣服の様式・模様等の項目に分けて詳細な読み解きを行ったが、これはミエン儀礼神画の特性を明確にするためである。取り扱った神画は地域的には湖南省永州市藍山県だけでは全体を明らかにできないと考えたため、近隣の江華瑶族自治县、近隣省の広西壮族自治区恭城瑶族自治县、そしてミエンの移動した地のタイ北部のナーン県ムアン郡、できる限り広い地域のものを収集し、比較分析を行った。本論では、儀礼の実践の中でどのように神画が使用されるか、神画に関係する儀礼文献の記述がいかなる内容であるか、所有する神画が祭司の儀礼執行能力と実施する儀礼とどのような関係にあるのか、多方面からの論証を試みた。論証を行うにあたり、湖南省永州市藍山県の祭司の実施する儀礼と儀礼中で使用された文書と使用された神画を事例とした。本来比較する別の地域についても同様の調査を行い事例を加える必要があるが、今回は湖南省永州市藍山県の事例のみから、神画と儀礼文献と儀礼実践を接合させた論証を試みた。

## 第2節 研究方法と研究目的

本研究は、ミエンの儀礼に用いられる神画をより全面的に考察するために、儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践を組み合わせるという独創的な研究方法を試みている。この三つの方向からの考察は、本論の第4章・第5章・第6章にあたるものである。以下、それぞれの考察の方向性について述べる。

## 第1項 儀礼神画から

過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画からの考察について、広域にわたって中国湖南省永州市の藍山県及び江華瑶族自治县、広西壮族恭城瑶族自治县、タイ北部などのミエンが伝承している儀礼神画に描かれている内容を徹底的に比較分析する上で、ミエンが持っている儀礼神画に描かれている内容の異同を明確するのが目的である。

本論の「第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれている内容の分析」では、Lemoine が *Yao Ceremonial Paintings*[1982]の中で神画に描かれている内容を紹介する際に必ず述べる点を参考にし、神画内の事象を細分化して項目に分け、情報を徹底的に読み取る作業を行う。設定した項目は主神と脇侍に分け、それぞれの配置、顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色、衣服の様式・模様等とした。湖南省・広西壮族自治区・タイ北部などの異なる地域のミエンが持っている神画の写真資料を11組<sup>7</sup>約180点収集し、項目ごとに表で示した(別冊・表1～表20)。表の分析を通し、異なる地域のミエンが所持する同種の神画に描かれる内容との異同を明らかにするものである。

## 第2項 儀礼文献から

儀礼文献においては、専ら中国湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)が持っている儀礼文献に収められている儀礼神画に描かれている神々についての記述を考察する。本論の「第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析」では、藍山県のミエンが伝承している神画を用いる儀礼に用いられる請聖書・賞光書というジャンルの儀礼文献に注目し、その中に収められた儀礼神画に描かれている神々についての記述を翻訳し分析することで、儀礼文献に記される神々の容貌や服飾などの特徴を明確にする。その上で儀礼神画と儀礼文献とはどのような対応関係を持っているのかを明らかにする。

## 第3項 儀礼実践から

儀礼実践について、専ら中国湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)が伝承している神画を用いる儀礼において神画が用いられる実態を考察する。「第6章 儀礼実践から見た過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の使用」では、藍山県のミエンが伝承している「掛三灯」や「度戒」などの神画を用いる儀礼の内容を考察することで、祭司は如何なる宗教段階を経て神画の使用資格を得てきたのか、儀礼に用いられる神画はどのような役割を果たしているのか、どのよう

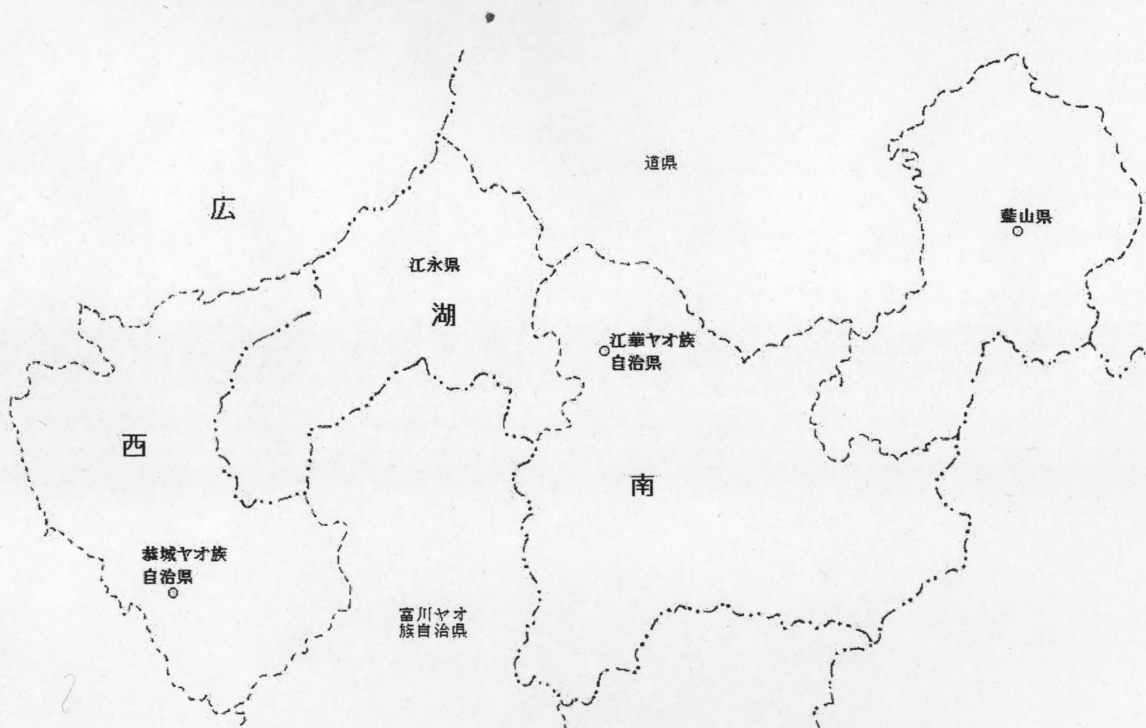


な意味を持っているのかを明らかにする。

なお、本論においては儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践の三つの方向から考察と分析を通じ、広範囲に分布しているミエンが所持する同種の儀礼神画に描かれる内容の共通点、また神画使用の一例とする湖南省永州市藍山県のミエンの儀礼に用いられる儀礼神画と儀礼文献と神画所有者の祭司と儀礼実践との関連を明らかにすることが可能になると考える。

### 第3節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の現地調査

ミエンはどこへ移住しても必ず彼らの信仰している神々が描かれている儀礼神画を持っている。中国南部及び東南アジアに広く分布しているミエンが持っている儀礼神画に描かれている内容の異同点を明確するため、異なるミエン地域から神画資料を収集する必要がある。また儀礼における神画使用の実態を把握するために現地調査も必須である。筆者は研究協力者として、神奈川大学ヤオ族文化研究所が中国湖南省永州市藍山県及びタイ北部ナーン県ムアン郡のミエン村で実施した調査に参加した。また、中国のヤオ族研究者の協力を得て、単独で現地に入り調査を行った。これにより、異なるミエン地域から数多くの儀礼神画の写真資料を入手するこ



〈図2〉 神画資料収集地の藍山県・江華瑶族自治県・恭城瑶族自治県の位置図

とができ、儀礼における神画使用の実態を観察することもできた。以下に、2011年11月14日から2014年1月8日までの期間において行われた、主に儀礼神画と関連する調査について紹介する。

### 第一回調査

2011年11月14日～11月22日に、筆者は研究協力者として、神奈川大学ヤオ族文化研究所が湖南省永州市藍山県所城鎮幼江村で行われた還家願儀礼の調査に参加した。儀礼に用いられたのは、藍山県匯源瑶族郷湘蘭村に住む祭司の趙金付氏が所持する神画（1組14点13種[別冊・図1-1～図1-20]）、藍山県所城鎮団源村に住む祭司の盤喜古氏が所持する神画（1組4点4種[別冊・図3-16～図3-19]）、藍山県匯源瑶族郷荊竹坪村寒鷄沖組に住む祭司の盤保古氏が所持する神画（4点4種[別冊・図2-16～図2-19]）である。これらの神画を撮影した上で、それぞれの神画の保存状況や伝承などについて聞き取り調査を行った。

### 第二回調査

2012年11月25日～11月27日に、筆者は張晶晶（華中師範大学人文社会科学高等研究院助理研究員）の紹介で、広西壮族自治区恭城瑶族自治县蓮華鎮黄泥岡村の通天廟で行われた「恭城蓮花鎮勢江源五冲瑶首届盤王節」に参加し、盤王節における神画使用の実態を観察した。その場で、恭城瑶族自治县蓮華鎮に住む祭司の黄通旺氏が所持する神画（1組17点17種[別冊・図6-1～図6-22]）、恭城瑶族自治县三江郷洗脚嶺村に住む祭司の趙乙昇氏が所持する神画（1組4点4種[別冊・図7-16, 図7-17-1, 図7-18, 図7-19]）の撮影を行った。聞き取り調査の際に、方言<sup>8</sup>から漢語への通訳は張晶晶が行った。

### 第三回調査

2013年2月9日～2月12日に、廣田律子（神奈川大学教授・ヤオ族文化研究所所長）と共に、湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村で春節の調査を実施した。その際に、趙金付氏から盤保古氏が所持する神画（13点12種）の写真データを入手した。第一次調査の際に撮影した写真と合わせると1組（17点16種類[別冊・図2-2-1～図2-20]）になる。また、神画の種類、伝承状況、及び神画に描かれる神々の由来について聞き取り調査を行った。

### 第四回調査

2013年11月17日～11月27日に、筆者は鄭艷瓊（江華瑶族自治县民族宗教事務局紀検組長・瑶学専門家）の紹介で、湖南省永州市江華瑶族自治县で行われた「神州瑶都2013年盤王節」に

参加し、盤王節における儀礼神画の使用について調査を実施した。鄭氏の協力の下で、鄭氏が収蔵している神画（1組17点17種[別冊・図4-1～図4-20]）、また江華瑶族自治县両岔河鄉両岔河村に住む祭司の李法科（法名）氏が所持する神画（1組20点18種[別冊・図5-1～図5-21]）の撮影を行い、それぞれの神画の収蔵及び伝承の状況について聞き取り調査を行った。盤王節の後、広西壮族自治区恭城瑶族自治县で張晶晶と合流し、三江鄉洗脚嶺村祭司の趙乙昇氏が所持している全ての神画の撮影を行い、第二次調査の際に撮影した写真と合わせると25点24種類[別冊・図7-1～図7-26]になる。さらに、同県三江鄉養牛坪の祭司が持っている神画の写真データを入手した（1組15点15種[図8-1～図8-21]）。

### 第五回調査

2014年1月3日～1月8日に、筆者は研究協力者として、神奈川大学ヤオ族文化研究所がタイ北部に位置するナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村<sup>9</sup>で行われた男性の通過儀礼である「掛三灯」儀礼の調査に参加した。儀礼の間では、神画を用いる実態を観察し撮影を行った[別冊・図9-1～図9-24-2]。この調査により、タイ北部と中国の湖南省南部及び広西壮族自治区東部のミエンが持っている神画と比較することが可能になり、海外におけるミエンの儀礼神画を観察する非常に貴重な機会であった。

神画資料の他に、本論では儀礼文献資料も多く取り扱っている。儀礼文献資料に関しては全て神奈川大学ヤオ族文化研究所から提供されたものである。なお、本論で取り扱う儀礼文献の出所などについては、論文の中で明記している。

### 第4節 論文の構成

本研究の主なる対象地域は中国湖南省永州市藍山県を設定している。この地域のミエンが様々な儀礼を伝承している。その中の神画を用いる「掛三灯」「還家願」「度戒」「葬送儀礼」などの儀礼は神奈川大学ヤオ族文化研究所により詳細に調査され、調査を通じて収集した儀礼文献の写真資料・映像資料・詳細な儀礼程序はウェブサイト(<http://www.yaoken.org>)に内部公開されており、通説1号から4号まで順次に研究成果が出版され、儀礼と儀礼文献に関する様々な研究が進んでいる。これらの成果は儀礼神画を考察するには貴重な資料を提供することで、儀礼文献と儀礼実践から神画を考察することが実現できるようになる。よって、筆者にとって藍山県は儀礼神画を考察する絶好の地域である。

筆者の調査によると、中国の湖南省南部及び広西壮族自治区東部のミエンの伝承していた多



くの儀礼神画は、文化大革命の中で破壊された。そして祭司を職業とする人が減ると共に、儀礼に使われない神画を画商に売り出すことも見られる。こうした理由から、現在の湖南省南部及び広西壮族自治区東部のミエン地域では、一つの村落には多くとも1セットの神画しか見つからない現状になってしまい、一つの地域では神画資料を大量に収集することが非常に困難である。2011年から2014年までに神奈川ヤオ族文化研究所は藍山県で合わせて3組44点19種類の神画の写真資料しか収集できなかった。この数の資料は、儀礼神画に描かれる内容を分析するには十分ではない。よって、本研究は、藍山県で収集した神画資料の他には、藍山県の西南部に隣接する江華瑶族自治县、広西壮族自治区東部の恭城瑶族自治县、タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村から収集した神画資料も取り扱っている。ミエンの儀礼に用いられる神画について広域にわたって比較検討することより、本研究で主に考察する藍山県の儀礼神画の特殊性と普遍性を理解しようとするものである。

こうした理由で、次のような章構成を取った。第1章の序論で、これまでのミエン儀礼神画に関する先行研究を批判的に分析することによって、本研究の課題を設定し、課題を解決する方法を述べる。第2章で、湖南省永州市藍山県におけるミエンの概況を示す。第3章では、ミエン儀礼神画の定義を行う。儀礼神画の種類と名称を解説し、藍山県の祭司が儀礼神画を所有する資格と権限について述べる。

こうした調査地域及びミエンの儀礼神画の大枠を踏まえた上で、儀礼神画の考察に移る。第4章では、儀礼神画に描かれる内容の分析を行う。まず分析に用いる11組の儀礼神画資料の保存や伝承などの状況について詳細に報告し、次いでこれらの神画資料をもとに作成した「神画内容異同表」について説明する。表の分析から、異なるミエンの地域の同種の神画に描かれる内容の異同を明らかにし、神画の地域的な特殊性と普遍性を示す。その上で、神画から見たミエンの特色及び道教的な影響を論じる。

第5章では、藍山県の神画を用いる儀礼に使われている儀礼文献の請聖書と賞光書に収められている、神画に描かれる神々に関する記述を翻訳して紹介する。記述の分析を通して文献記述に記される神々の容貌や服飾などの特徴を明確にする。その上で、儀礼神画と儀礼文献とはどのような対応関係であるのかに論及する。

第6章では、藍山県の儀礼実践において儀礼神画はどのように用いられているのかを考察する。まず、神画を用いる儀礼について概観する。次いで、「掛三灯」と「度戒」儀礼中での授法と関わる儀礼を考察することで、藍山県の祭司がどのような宗教段階を経て神画の所有資格を得てきたのかを論じる。それから、神画を新たに制作した際に行われる、神画に魂をいれる開光儀礼の事例を紹介し、「開光疏」「開光表」という開光儀礼に用いられる儀礼文献から見た神画制作の理由・開光儀礼の内容・神々に対する祈願の内容などを分析することで、開光儀礼

の目的と意味を明確にする。さらに、神画を用いる大規模と中規模の儀礼の中で、直接に神画と関わる儀礼の内容を考察し、儀礼における神画の役割を明確にする。これらを踏まえた上で、儀礼神画の持つ意味を明確にする。

これまでの儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践からの考察を踏まえて、第7章の結論では、湖南省永州市藍山県の儀礼神画の特殊性と普遍性、儀礼神画と儀礼文献と祭司と儀礼実践との関連を明らかにする。

## [注]

- 1 本地図は、インターネットからダウンロードした白地図に地名を加えて作成したものである。
- 2 廣田律子によれば、落兵落将とは、祭司が使役できる陰界の将兵を祭壇に降ろすことであるとする[廣田 2013a : 11]
- 3 『中国湖南省永州市藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告 I』によれば、ヤオ族の儀礼で使用される儀礼文献は、通過儀礼に関する写本、儀礼に用いる書類、神々を崇拝する神歌に関する写本、神々の呪文に関する写本、符、罡歩、手訣に関する写本（吉日を選ぶ暦、宗教職能者の受札の状況を記したもの等が含まれ、内容からは賞光書・伝度書・請聖書・意者書・歌堂書・超度書・歴書のジャンルに分類できると述べる[神奈川大学調査報告第12集・『中国湖南省永州市藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告 I』2011 : iii]。この請聖書は、請聖儀礼を行う際に使う儀礼文献である。
- 4 神々を祭壇に降臨するように招請する儀礼である。
- 5 神画を祭壇から下ろし、巻いてひとまとめにして置くことである。
- 6 廣田律子によれば、拆兵とは、祭壇を片付け神々を送ることであるという[廣田 2013a : 11]。また、「落兵落将」の際に、祭壇に降ろした陰界の将兵を祭壇から呼び出すこともあろう。
- 7 本論の分析に用いる11組の神画資料に関する詳細は、第4章の「第1節 分析に用いる神画資料について」で述べている。
- 8 現地では日常用語として「桂柳話」という方言を使っている。
- 9 当該村はヤオ族文化研究所客員研究員である吉野晃（東京学芸大学教授）の長年にわたる調査地であるという[廣田律子 2014 「刊行にあたって」神奈川大学歴民調査報告第17集『南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献目録』 : ii - iii]。

### 第2章 湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族(ミエン)の概況

ヤオ族は、現在中国に居住する55の少数民族の中の一つである。中国では瑤族(ヤオ)、タイとラオスではヤオ(Yao)、ベトナムではザオ(Dao)と呼ばれている[吉野 2005: 3]。「瑤族」という族称は、1950年代の初期に中国政府によって作出され、それ以前には歴史上では、「南蛮」・「徭」・「瑤」などと呼ばれていたが、中国建国後に、「徭」・「瑤」に代えて同音異字の美しい玉を意味する「瑤」字が採用された。

吉野晃は、「中国のヤオの話す言語はミャオ・ヤオ諸語のヤオ語群に属するミエン語(自称ミエン mjen, ムン mun など)、ミャオ・ヤオ諸語のミャオ語群に属するプヌ語(自称プヌ pu nu など)、タイ・カダイ語族に属するラッキャ語(自称ラッキャ lak kja など)などであるが、広西・湖南の一部では漢語を話している(自称ユー・ンギエン junjen など)。すなわち、中国では、言語的に異なる諸集団が『瑤族』の名称の許に纏められているのである。その半数以上の人口がミエン諸語に属する言語を話している」と述べる[吉野 2005: 3]。また張勁松らは、湖南省永州市藍山県に居住するヤオ族は、「ユーミエンあるいはミエンを自称し、他称は過山瑤・東山瑤・西山瑤と呼ばれる。日常用語としてミエン語を話すが、漢語も話せる」と指摘している[張勁松ほか 2002: 1]。

本章では、本研究の主なる調査対象地である湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)の人口・分布、自然環境・生業、年中行事・宗教信仰について述べる。

#### 第1節 人口・分布

2000年11月に実施された「中国第5回人口センサス」によると、ヤオ族の総人口は263万7421人[『2000年人口普查中国民族人口資料・上册』2003: 2-3]、中国に居住する55の少数民族の中で第12位に位置づけられる。また、省別では、湖南省70万4564人、広東省20万2667人、広西壮族自治区147万1946人、貴州省4万4392人、雲南省19万610人となる[『2000年人口普查中国民族人口資料・上册』2003: 80-81]。

ヤオ族は山地民族であり、主に海拔1000メートル前後の山林に分散して居住しているが、その中の一部は河谷や丘陵地帯にも暮らしている。東は広東省の南雄、西は雲南省の勐臘まで、北は湖南省の辰溪、南は広西壮族自治区の東興に至る1000平方キロメートルの山地に広く分布している[『瑤族簡史』2008: 1-2]。分布上に、「大分散、小聚居」という特徴が現れており、主に広西壮族自治区の都安・富川・巴馬・防城・龍勝・南丹・全州などの47県、湖南省の江華・寧遠・藍山・新寧・隆回などの22県、雲南省の河口・金平・屏辺・易武・勐臘・麻栗坡・広南・富寧などの17県、広東省の連南・乳源・連県・曲江・連山等の11県、貴州省の荔波・黎平・



從江・榕江などの6県に集中して居住しているとされる[劉耀荃ほか1988:10-36]。

湖南省のヤオ族は、主として西南部にかけての広西壮族自治区と広東省との境を接する地帯の山間部に広く分布している。湖南省南部に位置する永州市江華瑶族自治县は、中国全土においてヤオ族の人口が最も多い瑶族自治县である。また本研究の主たる調査地である藍山県でのヤオ族総人口は1万7608人となり[『2000年人口普查中国民族人口資料・上册』2003:818]、永州市においてヤオ族人口の第3位に位置づけられる。

藍山県のヤオ族は、明・洪武初年間に、両広(広東と広西)・江華・桂東・寧遠などの地域から、続々と県内に移住し、清末期まで長らく東山・西山・大源・小源の四つの山岳地帯に集住してきた。後に一部の人は、山地から平地へ移住し、土地を賃借りして生計を立てた。また、1952年に、藍山県人民政府は、ヤオ族の人々を土地改革運動<sup>1</sup>に参加させるため、平地へ移動させようとした。こうした様々な原因で、もともと山地に居住していたヤオ族の一部が、平地あるいは山と平地が境を接するところに定住するようになった。80年代初期に至り、県内ヤオ族の分布の状況に従い、県政府は東山・西山・大源・小源の四つの地域で荊竹・紫良・大橋・匯源・犁頭・漿洞の六つの瑶族郷を作った。[『藍山県志』677-679]

### 第2節 自然環境・生業

湖南省永州市藍山県は、湖南省の南部に連なる南嶺山脈<sup>2</sup>中腹の北側に位置する。東に臨武県、南に江華瑶族自治县と広東省連県、西に寧遠県、北に嘉禾県が隣接し、湖南省から広東省に通じる重要な地域である。南から北に傾斜し、両側の山脈が高く突き出て中部が凹む地形となっている。総面積は1810.14km<sup>2</sup>である。県内には主に山地であり、標高は最高1825.7m、最低は188mである。亜熱帯気候に属し、穏やかで十分な雨量があり、四季が明瞭に区別され、無霜期間は290日、降雨量は1527mm、年間の平均気温は17.8℃である。[『藍山県誌』1995:1-2]

藍山県は、動物や植物などの資源が非常に豊富であり、杉や楠竹などの木材、椎茸、木耳、香草、菓草などの特産品も豊富に産出し、集落の周辺には竹や常緑樹などが交じり合うようにして生えており、自然景観に富む。自己消費作物としてトウモロコシ、稲、薩摩芋、里芋、粟などを栽培し、換金する資源としては瑶族の集落によって異なるが、主に木材が共通している。

匯源瑶族郷は県内の木材生産の基地であり、藍山県西部の峻嶒な山岳地帯に位置する。海拔は1304mあり、総面積は50.1km<sup>2</sup>である。換金物として、杉、ハトムギ、金桔などを栽培している。匯源瑶族郷湘蘭村の村人によれば、杉を商品として出荷できるまでには、少なくとも十数年かかるという。よって林木を育てながら、広東省の広州市や仏山市などの都市部へ出稼ぎに出る人が多い。特に若者のほとんどが都会へ出稼ぎに出ているという。犁頭瑶族郷は、藍山県



〈図3〉 湖南省における藍山県の位置図<sup>3</sup>

の西部の山間部に位置し、主に木材と桐の油を産出する。漿洞瑤族郷は、藍山県東南部の山岳地帯にあり、最高海拔は 1400m もある。換金物として、木炭、蜂蜜、薬草、楠竹、筍などを栽培・生産している。紫良瑤族郷は、藍山県の西南部にあり、椎茸、木材、松脂、水晶石、花崗岩などを産出する。中でも椎茸が最も有名であり、国内外に知られている。紫良瑤族郷には藍山県で最も標高の高い山がある。「三分石」、「高炉石」、「金鶏嶺」の三つの山の平均海拔は 1780m あり、「高炉石」の西南部の峰は 1825.71m あり、県内で一番高い。荊竹瑤族郷は、藍山県の西南部に位置する。主に木材、椎茸、薬草を栽培するが、水晶石などの鉱石も産出する。[『藍山県誌』1995 : 43-48]

### 第3節 年中行事・宗教文化

藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)は、二十四節気に従って農業生産を行い、旧暦を使用して様々な行事や祭祀活動が執り行われている。これらの行事の中には、年末年始に行われる祖先を祭る行事があり、またそれと関わりがある清明節・敬神節・試新節・盤王節などの日もある。そ

## 第2章 湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族(ミエン)の概況

の他には、禁風・禁老鼠・禁水・禁野猪・禁秋などの禁忌の日もある。本節で述べる年中行事に関する事例は、主に『藍山県志』[1995]、『藍山県瑶族伝統文化田野調査』[張勁松ほか 2002 : 1-18]、「ヤオ族春節調査」[廣田 2013d : 133-136]、「藍山県ヤオ族の年中行事」[李利 2014 : 131-136]を参照した上で作成したものである。

まず、年末年始に行われる主な行事を紹介する。藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)の正月は1日の春節から15日の「元宵節」まで続く。春節は年間最大の行事であるという[李 2014 : 131]。匯源瑶族郷湘蘭村の春節行事に関する調査によると、1日の朝5時半頃に、家主がいつもより早く起き、先祖と三廟の祭壇に線香を立て、酒・灯明・豚の脂身を供える。また竈と戸口に線香を立て、酒を供える。続いてこれらの箇所、紙銭を燃やしながらかえごとをし、外の金銀財宝が我が家にやって来るように、五穀が豊穡になるように、祈願する。先祖と三廟の祭壇に、吉方から摘み取ってきた「金花宝朶」という葉が付いている枝の先端を供える。先祖と三廟の祭壇及び戸の框の上方の横木に「門関紙」という切り紙を貼付ける。2日から4日まで、先祖と三廟の祭壇・竈・戸口に線香・紙銭・茶のみを供えるが、かえごとはしない[廣田 2013d : 133]。門関紙は15日の元宵節の際に剥がす[廣田 2013d : 134]。また、春節に香龍<sup>4</sup>を舞う習慣もあり、藁と竹で作った香龍を舞いながら、家々を回り、新年の挨拶として龍を舞う腕比べをする。しかし、近年香龍を舞うことができる人が少なくなり行われない年もある。

年末の行事は主に12月の月末に行われる。24日は「過小年」の日であり、当日に祖先を含む様々な神々に対する祭祀が行われる。祖先の祭壇に線香・酒・水・豆腐・豚肉・紅蠟燭・紙銭・灯明を供え、祖先を祭る。門の内側には線香・酒・紙銭・灯明を供え、「把門將軍」を祭る。門の外の丁字路あるいは十字路に「土地公公」「七星姊妹」「一二四位夜鬼」「六郎廟王」を祭り、また、25日から30日までの間に神棚や墓などを修繕する[李 2014 : 134]。

年末年始に行われる行事の他には、清明節において墓参りし祖先祭祀を行う。6月6日の試新節には、初めての収穫を祝い、地蔵菩薩や家の神などを祭る。敬神節では、「包紅包」という重要な行事が行われ、数人の祭司を家まで招き、紅包を作り、日没後から家の祭壇で行事を行う[李 2014 : 133]。10月16日の盤王節は、ヤオ族にとって最大の行事であり、各地において集団で先祖の盤王を祭る。藍山県に隣接する江華瑶族自治县では、近年、毎年3日間ぐらいの盛大なイベントを開催するが、藍山県では盤王節を行わない。

禁忌の日は主に1月と2月中に集中しており、行事の内容様々であるが、主に日常の農業生産活動と大きく関わる。1月6日・16日・26日は「禁老鼠」の日であり、倉を開けては行けない[李 2014 : 135]。1日の10日・20日・30日は「禁風」の日で、雷を驚かせ騒がせないため、当日は物音を立ててはならず、老若男女は炉に当たって暖まりながら静かに一日を過ごす[張 2002 : 16]。2月1日は「禁鳥」の日であり、鳥の口先を象徴する竹の枝に、餅米で作った「ババ」を挿し、作物が害鳥に食べられないように祈る[張 2002 : 16]。2月2日は、作物の苗を食



べる「地虫」という害虫を禁ずる「禁地虫」の日である。2月3日は「禁水」の日であり、洪水によって畑を破壊させないため、畑に出ないという[張 2002:16]。2月4日は「禁野猪」の日で、作物を猪に荒らされないよう、山中に入らず農作業も行わない[張 2002:16;李 2014:9]。2月5日は「禁蝗虫」の日で、トウモロコシを蝗に食われないように、当日は畑に出ず、山の神を祭る[張 2002:16]。2月6日は「禁金蜂」の日で、山の神に薩摩芋の葉を食べる「金蜂」を放さないように願う。

藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)は、元始天尊・道德天尊・靈寶天尊・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・陽間・水府・十殿・太尉・唐葛周三將軍・監齋大王などの様々な神を信仰し、家先(家の先祖)及び始祖の盤王を祭る。母屋の正面の壁の左側あるいは右側には、必ず家先を祭る家先壇を設置する。家先に対して誠意をこめて、朝飯と夕飯の前に線香や酒を供える。壁の中央は盤王を祭る場所であるが、祭壇は設置しない。祭司の趙金付氏によると、盤王は彼らの心の中におり、彼らが住んでいる家は盤王の家であり、盤王は自由に出入りしているため常設の祭壇は必要ないという。

藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)は、様々な儀礼を伝承している。出産に関する儀礼は、分娩を促進する「催生符」を作る儀礼や、難産の場合の「剖腹符」を作る儀礼などがある[張 2002:10-11]。2010年8月に廣田律子は藍山県湘蘭村で調査した際に、趙金付氏に依頼し、筆者のために安産の符を作ってもらった。そのお陰で8月28日に無事元気な女の子が生まれた。他には病氣治しのために行われる架橋儀礼、年中行事として行われる送船儀礼もある。このような儀礼には基本的に神画を使わない。

日頃行われる儀礼の他には、藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)は「掛三灯」「還家願」「度戒」などの儀礼を伝承している。張勁松ら[2002]や廣田律子[2013a]などの研究者及び神奈川大学ヤオ族文化研究所[2009;2010;2011;2013]の成果報告によると、1980年代から、藍山県の紫良瑤族郷・匯源瑤族郷・所城鎮など地域で「還盤王願」「還家願」「度戒」「道場」などの儀礼が行われたとしたとする。藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)の男子は、家を継承する資格を獲得し、法名を代々の祖先が連記される「家先牌」という家譜に加えられるために、「掛三灯」儀礼を経て法名をもらう[廣田 2011a:335]。丸山宏の聞き書きによると、「法名は度戒儀礼に限らず、結婚や還願儀礼の時などにも得ることができる」とする[丸山 2010b]。法名は三清(元始天尊・靈寶天尊・道德天尊)の承認が必要である。過山系ヤオ族(ミエン)は、法名を獲得したら、陰兵(あの世の将兵)の加護を受けられ、自らを守り、他人を救うことができると考えている。

こうした藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)は、行事や宗教儀礼などの信仰の面において独自のアイデンティティを所持し続けていると考えられる。

### [注]

---

<sup>1</sup> 1950年から1953年にかけて行われた全国的な土地改革運動である。中国建国前に、地主階級が持っていた土地を農民に分けて所有させる制度である。

<sup>2</sup> 広東省と広西壮族自治区、江西省と湖南省の境を東西に走る山脈の通称である。揚子江と粵江へ流入する諸河川の分水嶺であり、華中と華南に分ける。騎田、越城などの諸嶺があり、標高は平均1000m前後である。

<sup>3</sup> 百度地図に地名を加えて作成したものである。<http://map.baidu.com/>

<sup>4</sup> 香龍に関して、三村宜敬は「湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族の送船儀礼」の中で、藍山県で行われた送船儀礼に使われる香龍の製作について報告している[三村ほか 2012 : 225]。祭司の趙金付氏は、春節に舞う香龍と送船儀礼の際に使う香龍はほとんど同じものであるという。

第3章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画について

本章では、過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の概念やその現状などについて述べる。

第1節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画とは

神画とは、信仰の対象となる神々の描かれた平面画像の掛軸(掛物)のことを指す。そしてヤオ族儀礼に用いられる重要な法具の一つである。神画は神聖的なものであり、女性は触ってはいけない<sup>1</sup>。

過山系ヤオ族(ミエン)の儀礼神画は、儀礼を執行する祭司によって所有され、通常時は自宅にある祭壇の横に掛けて保管されている。このように見える場所に保管している事例もあれば、祭司の自宅2階にある秘密の場所に置かれて保管される場合も見られる。儀礼の依頼を受けたら、儀礼が行われる当日、所定の場所に運び、祭壇周囲の壁に掛ける。祭壇は全て儀礼時に作られるので、神画を掛ける場所もその場で作られる。通常、祭壇正面の左から右に1本の縄を張り渡し、縄に神画を掛け、竹の棒あるいは木の棒を差し込んで安定させる。儀礼が終わると、神画を下ろして1枚ずつ重ね、巻いてひとまとめにしておく。それをビニールで包み、袋に入れたり、白色の布や綿紙<sup>2</sup>で包んだりもする。そしてそれを師棍に縛り、肩に担いだり、バイクの後ろに縛り付けたりして持って帰る。



〈写真1〉 祭壇正面の壁に掛けられている神画<sup>3</sup>





〈写真2〉 祭壇から下ろした神画を巻く<sup>4</sup>



〈写真3〉 白布で神画を包む<sup>5</sup>



〈写真4〉 師棍に縛り付けられた神画<sup>6</sup>



〈写真5〉 バイクの後ろに縛られた神画と法具など<sup>7</sup>

こうした儀礼に使用されている神画は、過山系ヤオ族(ミエン)は特に「神画」とは呼んでいない。筆者が行った現地調査の際、湖南省永州市藍山県では、祭司の間で、神画をミエン語で「sing」あるいは「konta」と呼んでおり、中国語に訳すとそれぞれに「聖」「功德」の漢字が相当するという。また広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷における、年配の祭司間で神画を「liangdougun」と呼んでおり、中国語に訳すと「羊皮卷」の文字に当たるといふ。また、張晶晶の口述によると、若い祭司の間では「神像画」あるいは「画像」と呼んでいるという。

こうした儀礼に使用される神画は、ヤオ族の行う儀礼以外の多くの宗教において見られる。例えば、チベット仏教に関する人物や曼荼羅などを題材にした「タンカ」と呼ばれる掛軸や、イエス・聖人・天使・聖書における重要な出来事・たとえ話などを描いた「イコン」と呼ばれるキリスト教の絵画もこれに当たるものである。また中国では、水陸齋<sup>8</sup>に用いられる仏教と道教に

関する人物を題材にした「水陸画」と呼ばれる掛軸もある。なお、漢族道教儀礼の場合は、神軸<sup>9</sup>、神榜、神図、神画<sup>10</sup> などと呼ばれているものもある。中国の少数民族において、彝族の神図<sup>11</sup> や、<sup>ナシ</sup>納西族の<sup>トンバ</sup>東巴絵画などは、信仰神が描かれた掛軸なども見られる。この類の画像は、全て神画に当たると考えられる。

過山系ヤオ族(ミエン)の神画について以下のように呼称している。Lemoine は、「Yao Ceremonial Painting」と呼ぶ[Lemoine 1982]。タイ北部に居住するヤオ族においては、「大堂鬼<sup>12</sup>」[竹村 1981 : 160]、「大堂画」tom tong faang [吉野 2005 : 75-76 ; 2011a : 86 ; 2013 : 115 ; ] などと呼ばれている。中国国内の研究者たちは、「盤王図」[左漢中 1994 : 43-63]、「盤瑤神像画」[黄建福 2008 ; 周飛戦 2011 : 70-74]、「盤王彩画」[『湖南瑤族』2011 : 396-397]などと呼称する。

以上、様々な神画に関わる名称を挙げた。その中で、漢族道教儀礼に使われている神軸・神榜・神図・神像・神画という名称の掛軸は、過山系ヤオ族(ミエン)の信仰神が描かれている掛軸に最も近似していると考え。神軸は主に掛け軸の形状を指し、神榜は文字が書かれたものであり、神図は図表のようなものを指し、神像は立体の彫像と平面の画像の両方を指している。これらの名称は、過山系ヤオ族(ミエン)の儀礼に用いられる信仰神が描かれている掛軸にはふさわしくないと考える。また本論の研究対象は平面画像のみとなるので、誤解を招かないように神画(信仰神が描かれる画像)という用語で統一する。神画という用語は、管見では浅野春二が「道教儀礼と神々」[浅野 2004 : 175]や「神画と道教儀礼」[浅野 2009 : 84]で用いており、さらに丸山宏の「道壇と神画」[丸山 2010a : 132-146]において、台湾南部の道教儀礼を行う際に祭壇に掛ける神々が描かれた掛軸についても神画という用語が使われている。浅野、丸山、両氏の論文に記されている「神画」という語が、過山系ヤオ族(ミエン)の神々が描かれている掛軸と最も相似しており、筆者も「神画」という用語を使用する。さらに、過山系ヤオ族(ミエン)神画研究の第一人者である Lemoine が用いた Yao Ceremonial Painting の日本語訳を踏まえた上で、本論では、「過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画」という用語を用いることとする。

## 第2節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の現状

過山系ヤオ族(ミエン)は、支系の多いヤオ族において最も移動性に富む集団であると言われている。長期的な移動の過程の中で、彼らの持っている神画は彼らと共に広東省・広西壮族自治区・湖南省・貴州省、さらにベトナム北部、ラオス、タイ北部などの地域に分布していった。移動途中や戦争などの混乱の中で、彼らの所有していた神画は売買され、現在では欧米の多くの博物館や個人によって収蔵されるようになった。その一方、そうした災禍を逃れ、ヤオ族の居住地ではヤオ族の人々が伝承している儀礼において神画が使用されている。

現在、博物館に収蔵されている過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の状況と言え、2010年11月に、神奈川大学で開催されたヤオ族伝統文献研究国際シンポジウムの際に、Lucia Obi (ドイツバイエルン州立図書館館員) は、欧米におけるヤオ族の儀礼文献の収蔵状況について報告し、ま



たヤオ族儀礼神画の収蔵状況にも言及した。Obi の報告によれば、ヤオ族の儀礼神画が骨董市場に最初に出回ったのは1970年代であり、ラオス内戦から逃れたヤオ族の多くはタイ北部の難民キャンプに集まり、儀礼神画は主にそこで収集されたという。神画の収蔵状況に関して、Obi は、現在欧米の多くの博物館にヤオ族の儀礼神画が所蔵されており、公的な博物館や図書館においても、少なくとも1組が所有されているという。さらに、アメリカのロードアイランド州ブラウン大学 Haffenreffer 人類学博物館、ドイツのハイデルベルク大学中国研究所、バイエルン国立図書館、ミュンヘン国立民族博物館などを事例として挙げ、それぞれの博物館に所蔵されている神画に関する情報などについて報告した[Obi 2010: 11-24]。Obi の報告から、欧米におけるヤオ族儀礼神画の収蔵状況を窺い知ることができる。



〈写真6〉弟子の頭に付けている神頭<sup>13</sup>



〈写真7〉祭司の頭に付けている神挿<sup>14</sup>

日本で、筆者が把握しているのは、国立民族学博物館と南山大学文化人類学博物館に過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画が収蔵されている。国立民族学博物館には、タイ北部の過山系ヤオ族(ミエン)が所持していた神画<sup>15</sup> (1組21点)、神頭<sup>16</sup> (10点)が収蔵されており、南山大学文化人類学博物館には、タイ西北部の過山系ヤオ族(ミエン)が所持していた神画 (1組18点) が収蔵されている。館蔵の神画以外にも、個人収蔵も見られる。神奈川大学ヤオ族文化研究所の調査によると、山下和正<sup>17</sup> が収蔵している過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画は100点以上あることが確認されている。しかし残念ながら、これらの神画はどのヤオ族居住地域から購入したものであるか出処地が明確ではない。

中国では、雲南大学伍馬瑶人類学博物館に湖南省永州市江華瑶族自治县の神画 (1組) と神頭 (2点) が収蔵されている<sup>18</sup>。また湖南省永州市江華瑶族自治县盤王殿の展示室にも数点の神画が展示されていることを確認した。湖南省永州市博物館にもヤオ族儀礼神画が収蔵されていると聞いたが、まだ確認していない。

以上述べたのは主に博物館に収蔵されている神画の状況である。しかし、神画というのは、博物館に収蔵されているものだけではなく、中国西南部の湖南と広西、タイ、ラオス、ベトナムなどの多くのヤオ族居住地において、神画は掛灯儀礼・還家願儀礼・度戒儀礼・葬送儀礼などの儀礼時に実際に用いられている。筆者の調査では、現在儀礼に用いられる神画の大部分は、清代 (1644年～1912年) に制作されたものである。神画に書かれた銘文には康熙 (1662年～1722



年)や光緒(1875年~1908年)などの年号が見え、そこから神画は300年以上の年月を経ているものもあることが分かる。さらに、神画の彩色は鮮やかで精美に描かれ、美術品としての価値を有すると考えられる。しかし、神画が儀礼に用いられる重要な法具であるゆえに、儀礼から神画を切り離してコレクションとして収蔵することや、鑑賞のみに用いることには危惧を憶える。その場合、神画の持つ法具としての意味も失い、標本資料となってしまうからである。神画には、諸々の神が描かれているばかりでなく、儀礼及び祭祀時の場面描写なども見られる。ヤオ族の人々は儀礼の場において、神画に描かれる自民族の物語を見て、自らの伝統文化の価値やアイデンティティを再認識できる。儀礼における神画とは、絵画表現という手法を用い、ヤオ族文化を記録する一種の教科書として、ヤオ族の伝統文化の継承のための装置でもある。さらに重要なのは、神画が儀礼に用いられることの意味である。この意味を解明するには、実際の儀礼を通して神画を観察しなければならない。このことから筆者は、館蔵の神画より実際の儀礼に用いられる神画を重要し、本論では、「儀礼に用いられる神画」という、ヤオ族の伝統文化としての価値を有する神画として考察して行きたい。

#### 第3節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の種類と名称

神画の全ての種類については、未だに明確ではない。竹村卓二や白鳥芳郎は、著作の中で「十八神像」という表現を使っているが、実際に神画は18種類ではない。湖南省永州市藍山県の祭司によれば、神画は18種類あるといい、広西壮族自治区恭城瑶族自治县の祭司は、神画は17種類であるという。実際に筆者が異なる過山系ヤオ族地域から収集した神画の種類をまとめてみると、18種類より多く、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府(1対2点)、張天師、李天師、把壇師、王靈官、馬元帥、鄧元帥、十殿、大海幡、海幡張趙二郎、総壇、太尉、唐葛周三將軍、監齋大王、大道橋梁、四府功曹(1対2点)、王姥、庫官、禁齋、施食、家先像、行司官像等27種類ある。もちろんこの27種類の神画は1セットのものというわけでない。1セットの神画の27種類中には、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府、張天師、李天師、大海幡、十殿の10種類と、元帥神が描かれる神画(把壇師・王靈官・馬元帥・鄧元帥)のいずれかの神画2種類が必ず入っている<sup>19</sup>。この12種類の上で、それぞれの地域の事情及び好みにより、さらに異なる種類の神画が加えられている。よって1組の神画に入っている神画はおおよそ17、18種類ぐらいになる。

神画はセット単位として所有及び使用される。湖南省永州市藍山県及び広西壮族自治区恭城瑶族自治县の祭司によれば、神画は「行師」と「三清兵馬」という2種類のセットに分けられている。「三清兵馬」は「行師」より等級が高い神画のセットである。「行師」はまた「行司<sup>20</sup>」とも書かれ、太尉・海幡張趙二郎・唐葛周三將軍・総壇の4点の神画のことを指している。「三清兵馬」は、三清である元始天尊、靈寶天尊、道德天尊の3点の神画を含む他の十数点の神画のことを指す。「行師」という名称に関して、この二つの地域の祭司たちは「行師」と書くが、儀礼に用いられる儀礼文献の記述から「行司」と記されることも見られる。

#### 第4節 湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族(ミエン)の祭司と神画

湖南省永州市藍山県の祭司の趙金付氏によれば、「神画は個人が勝手に所有することができず、祭司のみが所有可能である。もし、祭司がなくなって神画を継承する者がいなければ、その祭司の家族は神画を大切に保管しなければならない。『掛三灯』儀礼を経れば、『行師』神画を所持でき、『度戒』儀礼を経れば『三清兵馬』神画を所持できる。このような段階を経てから、祭司は儀礼を行う際に、神画を使用することができる。但し、『掛三灯』しか経ていない祭司は、その権限を越えて『三清兵馬』神画を所有することができない。その理由は、所有すると自身に害を及ぼすからである。『度戒』儀礼を経た祭司は、『三清兵馬』と『行師』神画を両方所有することができる。」という。なお、本論において、「第6章 儀礼実践から見た過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の使用」の「第2節 儀礼神画の所持及び使用の資格について」では、湖南省永州市藍山県で行われた「掛三灯」「度戒」儀礼を考察し、祭司がどのように神画の所持及び使用の資格を得たのかを詳述する。

#### [注]

<sup>1</sup> このタブーに関しては、まだ全部で確認していないが、恐らくどの過山系ヤオ族地域においても同様であろう。儀礼に用いられる祭祀画に関するタブーについて、様々である。例えば、「神画を祭壇から下ろして巻く際に、股に神画を挟んではいけない。神画に跨がってはいけない。收藏の際に、堂屋（家屋の中央の部屋）、祭壇、穀倉に置いて良いが、穢れものに近づく処に置いてはいけない。また、儀礼が終了後、祭司の持っている法具、特に神画を儀礼依頼者の家に忘れてはいけない。もし、神画を所有する祭司が亡くなったら、たとえ継承者が居なくても、神画を売り出してはいけない。神画を焚化してあの世にいる元所有者の処に送るか、あるいは他の祭司に贈るしかない。神画を売り出すことは、神々を冒瀆する行為であるため、きっと罰を受ける」とされる[顔新元 1994: 31-32]。

<sup>2</sup> 木の靱皮繊維で作られる紙である。色は白く、紙質は柔軟で靱性があり、繊維が細長く木綿のようであるため、「綿紙」と称する。

<sup>3</sup> タイの東北部に位置するヤオ族村の祭壇。2014年1月に神奈川大学ヤオ族文化研究所が現地で掛三灯儀礼を調査する際に撮影したものである。この祭祀場の壁には、もともと竹板を取り付けてあるので、神画を掛ける際に、細い竹の棒を竹板の隙間に差し込み、そこに神画を掛ける。撮影者：廣田律子

<sup>4</sup> 2011年に湖南省永州市藍山県所城鎮で行われる還家願儀礼中の「収聖（神画を祭壇から下ろして片付ける）」儀礼が行われる際に撮影された写真である。神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。写真番号：Khi20111118IMG\_9970s-。撮影者：廣田律子。

<sup>5</sup> 2011年に湖南省永州市藍山県所城鎮で行われる還家願儀礼中の「収聖」儀礼が行われる際に撮影された、祭司と弟子と協力し合って白布で神画を包む写真である。神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。写真番号：Khi20111118IMG\_9972s-。撮影者：廣田律子。

<sup>6</sup> 2011年に湖南省永州市藍山県所城鎮で行われる還家願儀礼中の「拆兵」儀礼が行われる際に、筆者が撮影した、祭場の戸口の外に置かれた師棍に縛り付けられた神画の写真である。

<sup>7</sup> 2011年に湖南省永州市藍山県所城鎮で行われる還家願儀礼が終了した際に撮影された写真である。祭司のバイクの後ろに神画や法具などのものが縛られている様子が撮影された。神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。写真番号：Khi201111121IMG\_1688s-。撮影者：廣田律子。

<sup>8</sup> 水陸斎の儀礼は、上堂へ毘盧遮那をはじめとする諸仏・諸菩薩・諸羅漢・諸祖師・諸神仙そのほかの神々が奉請され、その上で下堂に六道一切の群霊や孤魂を奉請し、彼らを慰め仏法に帰依せしめ飲食した後、儀礼と神々の力によってこれらを浄土へ往生させる儀礼であるとする[鷹巣純 2000: 114]。

<sup>9</sup> 神軸は、神榜・神図とも称する。龍巖閩山教道壇や浙江省磐安県樹徳堂道壇などの場合は「神軸」と称する[『福建省龍巖市東肖鎮閩山教廣濟壇科儀本彙編』1996: 263; 『浙江省磐安県樹徳堂道壇科儀本彙編』1999: 153]。江西省高安県浄明道壇の場合は「神図」と称する[『江西省高安県浄明道科儀本彙編』2006: 923-936]。

<sup>10</sup> 神画という用語が用いられているのは管見では浅野春二が「道教儀礼と神々」[浅野春二 2004: 175]や「神画と道教儀礼」[浅野春二 2009: 84]で用いており、さらに丸山宏「道壇と神画」[丸山宏 2010: 132-146]において台湾南部の道教儀礼を行う際に祭壇に掛ける神々が描かれた掛け軸についても神画という用語が使われている。

<sup>11</sup> 巴莫曲布嫫によれば、彝語「斯布茨布」の本来の意味は「神の像と鬼の像」という意味だが、特定の木の板や紙に書いて、具体的な巫術儀礼のために使うことになると、「神図鬼符」或いは「神図鬼板」という意味が出てくる。儀式を行う時に、神像が描かれる常用の材料は紙である。これを一般的には「神図」と総称するという[巴莫曲布嫫 1999: 512]。

<sup>12</sup> <霊界>のことを‘*tum toong*’といい、<大堂>と表記する。したがって、十八人の高官が構成する<霊界の中央政府>‘*tum toong mien*’は<大堂鬼>という。十八体の<大堂鬼>にはそれぞれ固有の名称と宇宙における座位が賦与されており、それを一体一幅の画像で表現する[竹村卓二 1981: 160]。

<sup>13</sup> [https://yaoken.sakura.ne.jp/data-room/memonly/image/limage/khi20111117IMG\\_8518s](https://yaoken.sakura.ne.jp/data-room/memonly/image/limage/khi20111117IMG_8518s)-撮影者：廣田律子。

<sup>14</sup> [https://yaoken.sakura.ne.jp/data-room/memonly/image/limage/khi20111117IMG\\_1320s](https://yaoken.sakura.ne.jp/data-room/memonly/image/limage/khi20111117IMG_1320s)-撮影者：廣田律子。

<sup>15</sup> <http://htq.minpaku.ac.jp/menu/database.html#outside> 国立民族学博物館 標本資料目録データベース H0199302-H0199322

<sup>16</sup> ヤオ族の仮面は「神頭」と呼ばれ、瓦状の紙板に描かれて作られるとされる[『中国民間美術全集(11) 游芸編◎面具臉譜卷』1993: 7]。湖南省永州市藍山県のヤオ族が持っている神頭は、「太尉」が描かれているものである。広西壮族自治区恭城瑶族自治县のヤオ族が持っている神頭は、「太尉」の他には「元始天尊」が描かれるものも見られる。国立民族博物館に収蔵されているタイ北部のヤオ族が持っていた神頭は、「太尉」「元始天尊」「道德天尊」3種類ある[<http://htq.minpaku.ac.jp/menu/database.html#outside> 国立民族学博物館 標本資料目録データベース H0199323-H0199332]。

<sup>17</sup> 山下和正(やました かずまさ)は、日本の建築家。工業デザインも手がけている。また、古地図コレクターであり、岐阜県図書館には山下和正コレクションがある[出典: Wikipedia]。

<sup>18</sup> 中国雲南大学伍馬瑶人類学博物館に収蔵されている過山系ヤオ族儀礼神画に関する情報は、王青(オハイオ大学グラフィックデザイン研究科修士課程在学)によって提供された。2014年6月に、王青は伍馬瑶人類学博物館に展示されている1組のヤオ族儀礼神画、神頭、法具などについて調査を実施した。

<sup>19</sup> 本論での神画に描かれる内容の分析に使う神画の種類に関しては、本論第4章第2節「読み取りの対象と神画内容異同表について」で詳しく述べている。

<sup>20</sup> 「行司」に関して、Lemoineによれば、道教の神々が一堂に描かれている衆神図は二つのサイズがあり、サイズが小さい掛け軸は「*tzu tsung*」(祖宗)と称するが、サイズが大きい掛け軸は「Full Altar」(息壇)と称し、時には「*heng fei* 行司」とも称するという。また、サイズが小さい掛け軸の「*tzu tsung*」(祖宗)は小さいほうの「*Hoi Fan*」(海幡)と「*T' ai Wai*」(太尉)と一緒に「group photograph」(組の写真)を構成しているという[Lemoine 1982: 126]。Lemoineが言っている「group photograph」(組の写真)は、神画のセットを指していると考えられる。この神画のセットを構成している3点の掛け軸の内に「*Hoi Fan*」(海幡)・「*T' ai Wai*」(太尉)の2点は、湖南省永州市藍山県と広西壮族自治区恭城瑶族自治县の「行師」神画を構成する「海幡張趙二郎」・「太尉」神画と同じだと見られる。しかし、Lemoineが言っている「*heng fei* 行司」は、「Full Altar」(息壇)のみ指しているが、神画のセットを指していない。よって、Lemoineが言っている「行司」は本論で使う「行師(行司)」と違うと考える。



### 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

本章では、神画にはどのような内容が描かれ、異なる過山系ヤオ族(ミエン)地域の神画の内容にはどのような異同があるのかについて、詳細な読み取りにより明らかにする。これまでの先行研究では、神画に描かれている内容に関する読み取りは行われているものの、複数の異なるミエン地域の神画の比較は行われておらず、単に、特定地域の神画に描かれる神々についての簡単な論述に留まっている<sup>1)</sup>。本論では、先行研究を踏まえつつも、更に厳密に神画の特徴を把握するため、神画に描かれる内容をより細分化して項目に分け、表で示し、分析を行う。別冊の表1から表19に示すように、それぞれの神画に描かれる内容を、主神と脇侍、配置、顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色などの項目に分け設定した。異なるミエン地域の神画資料11組約180点を表に示した。本章の第1節では、この11組の神画資料の基本情報について紹介し、表の分析を通して、異なるミエン地域に用いられている複数の同種の神画に描かれる内容の異同を明確にする。また、神画には銘文が記されているものがある。銘文には、神画を新たに制作した際の依頼者、絵師、神々に対する祈願、神画の開光儀礼が行われた日付などが記されている。この銘文の分析から、神画の制作及び制作の目的を考察する。以下、まず分析に用いる神画資料について紹介する。

#### 第1節 分析に用いる神画資料について

本論で分析に用いる神画資料は全部で11組ある。これらの神画資料は、神奈川大学ヤオ族文化研究所から提供されたもの、筆者が現地調査の際に独自に収集したものがある。以下、それぞれの神画資料の入手経路に関して述べる。

第1項の中国・湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村神画、第2項の中国・湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷荊竹坪村寒鷄冲組神画、第3項の中国・湖南省永州市藍山県所城鎮団源村神画、第9項のタイナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村神画で紹介する神画の写真資料は、全て神奈川大学ヤオ族文化研究所から提供されたものである。

第1項～第3項の神画資料は、神奈川大学ヤオ族文化研究所が課題「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の総合的研究」(2008年～2012年科学研究費補助金(基盤研究(B)研究代表廣田律子)及びトヨタ財団2009年度アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」企画題目「中国湖南省永州市藍山県のユーミエンの度戒儀礼に使用される儀礼文献・儀礼文書の保存と活用と継承」)のプロジェクトにより、2008年11月24日～12月12日に湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村で行われた度戒儀礼の調査、2010年4月28日～5月5日に同村で行われた第2回度戒儀礼の補足調査、2011年11月14日～22日に湖南省永州市藍山県所城鎮幼江村で行われた還家願儀礼の調査の際に撮影されたものである。さらに、神奈川大学ヤオ族文化研究所が、課題「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の保存・活用・継承」(2012年～2014年科学研究費助成事業(基盤研究(B)研究代表廣田律子)において、2013年2月9日～12日に湖南省永州市藍山県

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

湘蘭村で春節調査を実施したが、その際趙金付氏が撮影した荊竹坪村寒鶏沖組に住む祭司の盤保古氏が所有している神画の写真資料をもらった。

第9項の神画資料は、同プロジェクトで2014年1月3日～1月8日に、北タイナーン県ムアン郡ナムガムガオ村で男性の通過儀礼である掛灯儀礼調査を実施した際に、撮影されたものである。

また、第11項の神画資料は、同プロジェクトで2014年7月7日～8日に、愛知県の南山大学人類学博物館が所蔵する上智大学から移管された「西北タイ歴史・文化調査団資料の神画資料」のうち、神画資料調査を実施しが、本論で掲載及び分析に用いた写真資料は、南山大学人類学博物館から借用したものである。

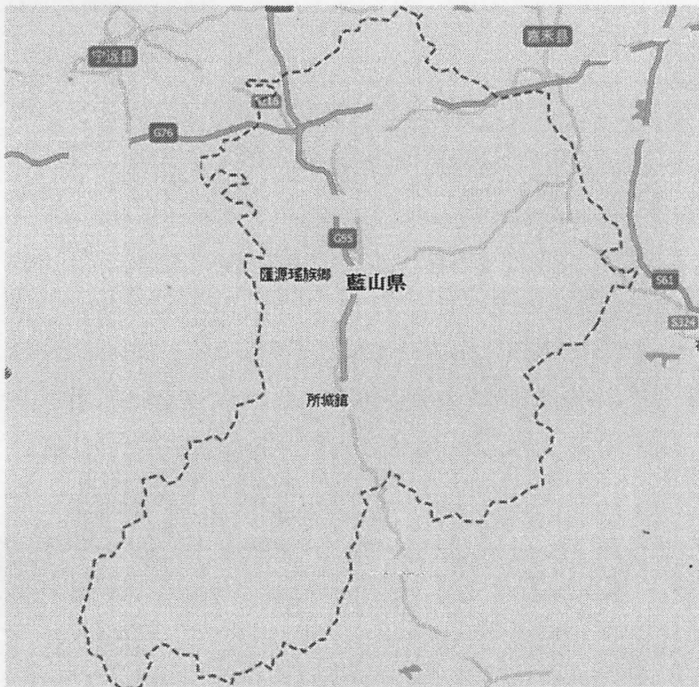
第4項～第8項の神画資料は、筆者が課題「ヤオ族儀礼神画の研究」(2012年～2014年度神奈川大学日本常民文化研究所・非文字資料研究センターの奨励若手研究者)において、中国湖南省永州市江華瑶族自治县、及び広西壮族自治区恭城瑶族自治县で、2回ずつのフィールド調査を実施し、鄭艶瓊及び張晶晶の協力の下、江華瑶族自治县で2組、恭城瑶族自治县で3組収集できた

神画の写真資料である。

第10項の神画資料は、『道教文物 Cultural Artifacts of Taoism』<sup>3</sup>に掲載された図録を引用したものである。

本論で分析に用いた全ての神画の写真資料は、実際の儀礼においては、ひと揃い<sup>4</sup>として使われるものである。また神画はどの地域で使用され、その所有者や、儀礼の使用実態も明らかである。分析に用いるには、少なくとも以上の条件を満たすものを本論での神画資料の選定条件としている。

以下、この11組の神画資料の所有者・保存状況・継承経路などについて詳細に紹介する。



〈図4〉湖南省永州市藍山県地図<sup>2</sup>

### 第1項 湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村神画

中国湖南省永州市藍山県は、湖南省の南部に位置している。東に臨武県、南に広東省連南瑶族自治县、西に江華瑶族自治县、北に寧遠県が隣接している。匯源瑶族郷は、藍山県県城西部の標高の高い山岳地帯に位置し、湘蘭村は5つある村の中の一つである。